

帝國大學教授正七位内藤耻叟
慶應義塾大學部講師小宮山綏介
標註

浮世のゆかり
繪類考

東京 博文館藏版

增補浮世繪類考

解題

此書は蓋し好事家數人の書を聚合して成るものなり、初め笹屋邦教なるもの、浮世繪類考の編ありしを、寛政の末に更に自ら追加して附録とす、是その原撰なり享和二年に、山東京傳これに追考を附し、式亭三馬又これに補記を加ふ、(或は云、蜀山の書入もあり)、其後、天保四年に、隱士無名翁、右の三書を集めて一部となし、更にその考を加へて、續浮世繪類考と題す、ざるを弘化元年に、齋藤月岑再び補記を加へて、増補浮世繪類考と改題し、久しく抄本を以て世に行はれしが、展轉傳寫の間に前後錯亂して、其孰れか原撰、孰れか追加増補たるを識別すべからず、故を以て体裁蕪穢、訛脱甚多し、因て數本を集めて相互校訂し、以て叢書中に加ふ、是より先、龍田舍秋錦なるものあり、右の數部を合して改選し、新增補浮世繪類考と題し、近頃刊本ありて世に行

はる、其書新增する所、もとより多けれども刪落する所も亦少からず、斯ては原著の卒に湮没に歸せんとを患ひ、編者此校刊の舉ある所以なり、(一種吾妻錦繪類考と題するものあり、本編と全く同書なり、後人の妄りに改題したるものならん)

笹屋邦教は、其姓を知らず、俗稱を新七郎といふ、府下本銀町一丁目に在て、縫箔を營業とす、常に浮世繪を玩ふとを好み、筆に信せて見聞する所を記置るものあり、乃ち浮世繪類考の原著是なり、其他の事蹟不詳、

山東京傳は岩瀬醒が戯作の號なり、其傳は本書(北尾政演)に具す、故に此に省く、

式亭三馬は、西宮太助が戯號なり、名は久徳字は泰輔といふ、本町庵遊戯堂洒落齋等の數號あり、四日市の小書肆にて、旁ら戯作を業とす、其作最も滑稽に長す、又洒落本も數種あり、文政五年閏正月没す、年四十八、その傳は小説史稿、江戸作者部類等より詳かなり

隱士無名翁は、池田義信是なり、其傳は本書（溪齋英泉）に具す

齋藤月岑は、名を幸成號を松濤軒、俗稱を市左衛門といふ、世々神田雉子町の名主なり、維新の後は、ろの中年寄となり、晩年には東京府の雇員たり、性潔を喜みて一日に必ず三浴す、又酒を嗜みて常に杯酌を手にせり、最も稗史野乘を讀むとを好み纂述する所甚た多し、武江年表、聲曲類纂、東都歲事記の如きは、既に上梓して世に行はる、又江戸名所圖會は、其祖長秋及父縣磨の編述する所なれど、幸成整理して刊行す、其博雅は他の名所圖會の遠く及はざる所なり、明治十一年三日没す、歳七十五、淺草法善寺に葬る、

增補浮世繪類考

目錄

岩佐	又兵衛	大津	又平	當世	又兵衛	當世	半兵衛
菱川	師宣	英一	蝶	西川	祐信	橘守	國
雛屋	立圃	蒔繪師源三郎	月岡	丹下	羽川	珍重	
野々村	治兵衛	下河邊	拾水	長谷川	長春	吉田	半兵衛
近藤	清春	鳥居	清長	奧村	政信	奧村	利信
奧村	文志	西村	重長	石川	豐信	鈴木	春信
懷月	堂	珉	江	川枝	豐信	阿	りう
富川	房信	一筆	齋文調	柳	文朝	鳥山	石燕
細田	榮之	湖龍	齋	寫	樂	戀川	春町
窪俊	滿	春	潮	珠雀	齋	歌舞	妓堂
宮川	長春	勝川	春章	小松屋	百龜	勝川	春英

勝川 春好	勝川 春亭	勝川 春扇	春川 榮山
春川 五七	北尾 重政	北尾 政演	北尾 政美
喜多川 歌麿	歌川 豐春	歌川 豐廣	歌川 豐國
歌川 國政	法橋 玉山 _{二代目}	法橋 關月	法橋 中和
東 野	春曉 齋 _{二代目}	竹原 春朝齋	歌川 國貞
歌川 國長	歌川 國丸	歌川 國安	歌川 國直
歌川 國芳	葛飾 爲一	辰 齋	戴 斗
蹄齋 北馬	魚屋 北溪	岳亭 春信	柳川 重信 _{山重}
菊川 英山	溪齋 英泉	後藤茂右衛門	泉 守 一
堤 等 琳			

增補浮世繪類考

笹屋邦敬原撰
諸家增補

東都第一の名産として他郷の者、江戸より歸るには、江戸繪と云て必ず是を求る事となれり、世俗是を一枚繪といふ、先に山東醒生翁曰、延寶天和の比の一枚繪といふ物を藏せる人ありて、見るに西の内といふ紙一枚ほどの大きさありて、ねほくは武者繪にて、丹緑青黄土をもて、どころまだらに色どり、大津繪の今少し不手ぎはなる物なり、畫はみな上古の土佐風にて甚よし、畫者の名はしるさず、もとより歌舞妓役者遊女の類ひの姿をかゝず、元祿のはじめ、下り役者の姿をかきはじむ、丹と楠といふものにて色どれり、江戸眞砂子六十帖に云、元祿八九年の比、元祖團十郎鐘馗に扮す、その容を畫き刻て、漸に賣る價錢五文、是より役者一枚繪と稱するもの數種を刻すと云、寶永正徳の

比迄専らにあり、享保のはじめ、同朋町和泉屋權四郎といふ者、紅彩色の繪を賣はじむ、是を組繪と云、夫より色々に工夫して、墨の上に、にかはをぬり、金泥などを用ひてうるし繪と云て、大に行はる、寛延の比より、彩色を板刻にする事をはじめて、紅藍黃三遍摺なり、明和のはしめ吾妻錦繪といふもの出來始て今に至り益々華美を盡せり、或人云寛文の比は板刻繪なし、大津繪の如く種々の武者繪をかき畫にしてうりぬ、板刻になりしは、延寶の比がはじめなるよし、しかるやいなやを知らず、享和壬戌冬十月記とあり、(山東京傳が蜀山人所藏の浮世繪類考校訂の追考の卷末にしるして送りしものなり)板刻の畫は、寛延の比より起りて、天保の今に至る迄八十餘年のものなりとればゆ、亦く摺込の彩色繪多く在しと云り、上方にては今も多し、錦繪の精巧、天明寛政の比迄は、京大坂にては、等閑のものなりしに、今は江戸にも勝れて佳製多くなりぬ、寛政の始めより金銀銅粉雲母入の彩色摺をはじめしより後、正面摺ぎん出し等の工風をなせり、近比狂歌春興の摺物に美を盡し、春毎

に互におとらじとて、寫眞摺無地金摺などを製しければ、再應是を禁じられ
たり、是より江戸賣買の錦繪に金摺りは止みたり

按るに、寶曆明和の比は、今切繪と云て、みよし四ツ切りの三遍摺の繪あり
是等の類ひ成へし、その後大奉書摺となりて奉書ニツ切を大錦と云、今は
大奉書中奉書ハ不用、イヨマサと云紙を用ゆ、合にしきも最上紙を用ゆ、
伊豫奉書ニツ切を合錦と云り、みよしニツ切を小合錦と云、大錦ニツ切は
中錦、合錦二切は中合と云、伊豫奉書豎四ツ切をきめと云、其外種々の紙數
品國產の紙を（國紙と云）用ひて、様々の唱へありといへり

草雙紙も文化の比より、錦畫の表紙となりて、合巻といふものになりぬ、正徳
享保の比、赤本と云ひ紙數五枚位綴たるは、唐紙の表紙なりしを、赤く染たる
紙になりたる、是を赤本と云、夫より萌黄色の表紙となりしを青本と呼ぶ、其
後黄表紙となりしをも青本といふ、天明寛政の比葛藟本とて、すぎかへしの
とき色の薄紙表紙を付半紙すりにて袋入にしたる草雙紙ありし、是より今

の畫表紙の合卷を製本せしものなり、（今吉原細見五葉の松の製本のみに其体裁を改めず）

按るに赤本と云しは金平本と云、紀逸が黃昏日記に曰、元祿年間の板なり、岡清兵衛は金平本の作者なりと有り、夫より後は西遊記を譯せし桃太郎宇治拾遺の物語なり、舌切雀花咲ぢゝいの一期榮し昔咄しを作り童蒙の弄びとなせし赤本とはなりけん、其後返魂紙五枚ツ、綴て價を六文に賣る、黃表紙となりし比は、三四遍摺の繪を切て、表題に張しが、享和年間に價十文ツ、になりたり、此比迄は昔咄又は目出度作りし草雙紙なりしか、京傳の滑稽行はれて年毎に奇をあらそひ、童蒙の目を悦はしめんとて、敵討の物語りとなり、前後篇を望みしより一年二年と篇を次々とになりて、染表紙の上へに錦繪を切援て張りけり、此比より半紙摺となり、或はスンコと云紙にて製す夫より表紙一面の繪をはり、また是を錦繪の摺付表紙となせしなり、（板元江見屋の工風より繪表紙の合卷となれり、文化のはじめなり）

是よりいつとなく草雙紙の名は廢れて、合卷とのみ呼び來れり、近世は道
中雙六もさまざまに工風して美を盡し、千代紙白粉齒磨の袋まで、錦繪摺
にならぬはなし、美麗を盡すの限りといふべきものなり、

○岩佐又兵衛（土佐又兵衛 浮世又兵衛とも云） 姓藤原 荒木氏
越前之産なり（一説に攝津に住とあり、據有れば姑く越前に從
ふ）

父は荒木懋津守村重と云、織田信長に仕て軍功あり、公賞して攝津を與ふ、後
公命に背て自殺す、又兵衛時十二歳、乳母懷て本願寺の子院に隠れ、母方の氏
を假て岩佐と稱す、成人の後織田信雄に仕ふ、畫圖を好て一家をなす、能當時
の風俗を寫すを以て、世人呼て浮世又兵衛と云、世に又平と云は、畫所預家に
畧傳あり、（好古日録） 秀吉信長の使として荒木村重が有園の城に來る、河原
林治冬、秀吉を殺せと云ひしとて、秀吉脇差を引出物として是を稱す、天正元
年四月、信玄卒し、義昭公信長と不和に成、將軍家譜代の臣細川藤高、茨木の

城主荒木村重兩人、佐久間信盛に寄て信長に降參す、岐阜の城にて對面の時、信長刀の切先に饅頭二ツ三ツつらぬき、我芳志なりと指出し給ふ、村重大の口をあき、切先の饅頭を一つ口に喰んとす、信長笑ひ玉ひ、其後攝津を與ふ、（以上記考になき文也）藤貞幹の好古日録に見ゆ、按るに是世にいはゆる浮世繪のはじめなるべし、又大津畫も此人の書出せるなりといふ、（杏花園藏以上浮世繪類考）

追考曰、按に一蝶が四季の畫の跋に、越前の産としるしたるを見れば、越前に於て成人せしと覺ゆ、名字は知る人もなかりしにや、たしかにしるしたる物を見す、又兵衛が父、荒木攝津守名は村重、家士に重郷（姓氏不詳）といふ者あり、俗稱久藏、後に内膳と改め一翁と號す、狩野松榮直信元信の長子兄祐雪宗信の養子、門人にて畫をよくす、一説に又兵衛ははじめ此人を師として、畫を學ぶ、後に土佐光信が明應の畫風に倣て一家をなせり、世に光行の門人と云は誤りなり、時代同しくすと云、然るやいなやをしらず（以上追考

原注月峯云光
信は土佐光弘
の男大永五年
卒九十二才な
り

山東京傳の考)

岩佐又兵衛は姓氏實に未詳といへり、見聞せし處、繪は土佐流の名手なり、花鳥人物共に彩色筆意、絶妙と云へし、就中浮世人物に妙あり、土佐流にて浮世の人物をさして、雜人形雜人物、浮世の人物、或は武者人形大和人物ありとの唱へあゝ、土佐守門弟なりと云、 年間の人なり、故有て姑く勘氣を蒙り、流浪して書を以て渡世とす、(今云町繪師の如くなるべし)從來名を好まず業にほこらず、何くれとなく人の求るに應じて書くといへども、妙手なれば自ら世に鳴り、用ひられしと云り、土佐流破門の弟子なればとて、今に至る迄、又兵衛の畫は土佐家より鑒定せず、極きはみを不出、添手紙のみなり、是を折紙とす、禁裏繪所預は土佐流なり、將軍家にて狩野氏の繪を用給ふが如し、故ありて詳にしるしがたし、

又兵衛畫に名印有る物は究て少し、遊女の畫などには、墨肉にて字体分明ならぬ印有も多し、世を送るたづきとせしのみなる性質、是にてたしかなり、當

年中)と云に、土佐の末弟浮世又平重興と云者、大津に住て書をかきたるよしをつくれり、是よりしてますく虚説を傳ふ、或説に大津又平と云者ありてかきはじむ、享保の比迄、其子孫ありしと云、予大津の古畫、奴の槍を持たる圖を藏す、八十八歳又平久吉とかきて花押あり、古雅なるものなり、彼又平か子孫の畫か、貞享四年板好色旅日記に、大津、追分やつて槍持の勢ひのなき畫をうる大谷云々、槍持の畫もふるものと見ゆ、大津畫も浮世繪に類し、且浮世又兵衛かとを辨せんが爲に、是を記す

○當世又兵衛(名を似せたる物なるべし)

○同 半兵衛(按するに吉田半兵衛なるべし)

元祿五年板買物調方三合集覽に、京にて當世繪かく、丸太町西洞院古又兵衛とあり、是等も岩佐又兵衛が名を似せたる物なるべし、又是にならばせて四條通御旅所のうしろ半兵衛とあり、是等も京の浮世畫師なり(以上浮世繪類考追考山東庵考證杏花園藏書)

○菱川師宣(正保の生、正徳中没す、年七十餘)姓藤原(一説)日本繪師
菱川氏俗稱吉兵衛後剃髮して友竹と云、安房國平群郡保田町の産
なり

吉兵衛師宣は若年の時より江戸に移居して、縫箔師を業とす、後書を□□
門に入て學ひ後一家をなせり浮世繪に妙手なり亦板下書を多くかけり、浮世
板下書の始祖と云へし、後剃髮して友竹と云、村松町二丁目に住す
傾城遊女をよく寫せり、彫刻の書本多し(浮世繪類考山東庵追考)

菱川師宣傳并系圖

菱川吉兵衛師宣、剃髮して友竹と稱す、初めは縫箔を以て業とし、上繪と云
ものより書を書きならひて、後一家をなせり、英一蝶と時を同ふすといへど
も、十年ばかり先立て世に行はる、案るに師宣は土佐の畫風を好て、浮世又兵
衛(光佐氏)が筆意に倣て一家をなせり、一蝶は狩野家の筆意を以て一家を成
せり、共に近世の名畫なり(一蝶わかゝりし時、師宣が畫風をしたひし事は、

四季の畫跋（一蝶の部に出せり）と云ものに、岩佐菱川が上にたゝん事を思ひと自らかけるを以て證とすへし、師宣專はら印本の板下と云ものを畫きて、板刻の繪本甚多し、他國の人、江戸繪と稱して板刻の畫を玩ぶは、此人に起れり、みなし栗

山城の吉彌むすびも松にこそ

其角

菱川やうの吾妻係

おろかけ

嵐雪

みなし栗は天和三年の板なり、此比さかりに行れたるを見るへし

菱川氏系圖

藤原姓

菱川七右衛門

房州平群郡保田町住
紺屋ヲ業トス

菱川吉左衛門道茂入道光行

寛文二年二月十五日没ス

房州平群郡保田町住

家業 縫箔屋、其業精妙也

實子

菱川吉兵衛師宣入道友竹

浮世露ノ祖、給メ縫箔師、後以ニ爵名ニ爲シ一家一

房州平群郡保田町ノ産、若年ノ時、江戸ニ移居ス、正徳年中、江戸ニ於テ没ス
享年七十餘

居所ヲ考フルニ貞享四年坂江戸鹿子ニ村松町二丁目、元祿二年板江戸圖鑑、及同五

年板買物調方三合集覽ニ欄町トアリ一説、堺町横町、又大傳馬町二丁目ト云、是等轉宅ノ處ナルヘシ

二男
同

正之丞

門人

菱川政信

字守節
書風ハヨク師ニ似タリ

門人

菱川友房

書風ハ似テ筆オトレリ

門人

古山太郎兵衛師重

江戸長谷川町ニ住ス元祿中ノ人、圖鑑ニ見ユ三合集覽ニ菱川太郎兵衛トアリ古山ハ本姓ナルヘシ

古山新九郎師政

享保中ノ人
稱文志
兩國米澤町江戸屋長屋ニ住ス

此人ニ至テ菱川家書風ヲ失フト世事談ニ見ユ

實子

菱川吉兵衛師房

始吉左衛門ト稱ス鹿子及圖鑑三合集覽等ニ吉左衛門トアリ父師宣ト同居始畫師後紺屋ヲ業トス

二男

沖之丞師永

鹿子及圖鑑ニ作之亟トアリ一説ニ酒造之亟、父ト同居彩色ニ妙ヲ得タリ

實子

佐次兵衛重喜

家業紺屋

同

彌右衛門

師宣ノ血脈、六代目ニ至リテ絶ス今養子ヲ以テ家ヲ續、房州保田町ニ在リ是七代目ナリ
女子他ニ嫁シテ生ル血脈ノ者、同所他家ニハ有ト云

房州保田村林海山別願境内に在る

洪鐘一口（周廻七尺厚二寸五分、口二尺二寸五分、長サ三尺五寸）

寄進施主 菱川吉兵衛尉藤原師宣入道友竹

元祿七甲戌歲五月吉日（鐫字上の如し予打本一紙をおさむ）

以上房州保田町醫師澁谷元龍に問て其實を記す、元龍は菱川の親族なり
（以上京傳類考追考）

杏花園藏浮世繪類考曰、菱川吉兵衛師宣、大和繪師、大日本畫師とも稱す、房州の人なり

繪本師宣筆

和國百女三冊（元祿八年板）やまどの大寄一冊 勇士ちから草三冊（貞享二年の板大傳馬町三丁目鱗形屋開板）書本大和墨三冊 月次のあそび二冊（元祿四年板）戀のみなかみ一冊（此比の板刻數本あり）

其外天和貞享の比の板本多し貞享四年の板江戸鹿子に浮世繪師（村松町二

丁目) 菱川吉兵衛 同吉左衛門

元禄二己年板江戸圖鑑に

浮世繪師 橘町 菱川吉兵衛師宣 同所 同吉左衛門師房

長谷川町 古山太郎兵衛師重 淺草 石川伊左衛門俊之

通船町 杉村治兵衛主高 橘町 菱川作之丞師永

天和四年板まくら大全に、菱川吉兵衛師宣とあり

貞享三年訓蒙圖彙原板は吉田半兵衛畫、再板は師宣畫

床談儀、艶書軌範、旅葛籠、色雙子、近世大よせ、共に師宣畫なり

と、しかるやいなや未だ見ず

貞享元禄の頃の板元江戸大傳馬町二丁目鱗形屋(吉左衛門孫兵衛)今馬喰町
西村與八なり

元禄五年板買物調方集覽(横切本一冊)

江戸浮世繪師菱川吉兵衛 同吉左衛門 同太郎兵衛

三馬曰元祿十年板國家萬葉記（七の下に）

菱川吉兵衛

大和繪師 同 作兵衛 村松町二丁目

同吉左衛門

斯の如く出たり

按るゝ井澤長秀が俗説辨に國史を引て、大和畫師は倭畫師なりとて猥りに稱すべからざるとを述たり、（俗説辨に曰俗間の畫師、みたりに倭畫師とかく者あり、倭畫師は姓なり、續日本紀曰、靈龜元年乙巳、從六位下江見押勝か姓を更爲倭畫師と有るをみるべし、みたりに書くからず）

○英一蝶（一蝶の傳、諸書に記すを見るに誤り多し、浮世畫師と云にも有ね共、時世の人物を畫き、師宣が畫風に出たるとも見ゆれば、暫く浮世畫に別す）姓藤原、多賀氏（一に英氏と云、母の姓花房と云り）攝州大坂の人なり、俗稱助之進、父は醫師なり、十五歳の時

江戸に來り狩野安信（古右京養子探幽尙信常信安信と續、慶安より正徳の人）門人となる、名は信香、一に安雄、始め多賀朝湖と云、後に英一蝶と改め、一家をなす、書畫ともに能す、風流の秀才子なり、翠養翁と號す、（一に養翠と云は誤りなり）又牛丸（幼名と云は非なり）曉雲（俳諧の名なり曉雲堂とも云）舊草堂一蜂閑人（後に門人にゆづる）隣樵庵、鄰濤庵、北窓翁等の數號あり

傳に曰、一蝶は親に孝なりし人と云り、俳諧は芭蕉翁の門人にして、其角嵐雪等と友なり、名を曉雲和央（一に作和應）と云しは、花街に於て呼し名なりと云り、元祿十一年十二月（八年とするは訛なり）吳服町一丁目新道に居住の時、故有て謫せらる、時に歳四十七歳、謫居にある事十二年、寶永六年九月（四年とするは非なり）歸郷せり其後英（一説花房とす、母の姓なりと云）一蝶と稱し北窓翁と號す、享保九年甲辰正月十二日没す、行年七十三歳、麻布二本榎日蓮宗承教寺塔中顯乘院に葬る

辭世、まぎらかす浮世の業の色とりも、ありとや月の薄曇の空　一蝶

一蝶に老母一人あり、剃髪して妙壽と云、一蝶八丈島に配流せられて後、一蝶が友宗珉が家にやしなはる、宗珉俗稱横谷次兵衛、檜物町に住す、正徳三巳年三月三十日没す、顯乘院に葬す(以上類考追考京傳が記)

一説に曰、一蝶配流せられ、老母を養ふ親族なし、官舎へ此事を願ひ、謫居より畫を賣るとを赦されて、其價を以て母を養ふ、島一蝶と云は是なりと云(未詳ならず誤りならんか、横谷宗珉へ、謫居の圖を母に見せ度と送りしは私のことなり、ひさくへき畫の中へ入て送りたると思へは、是とするところもあり)

嵐雪撰其袋(元祿三年板一蝶句あり)

花に來てあはせ羽折の盛かな　　曉　　雲

朝寝して櫻にとまれ四日の雛　　同

高嵩谷藏

英一蝶

七十三

承應元年生ル享保元年没ス

二代目養子

一蝶

名信勝
俗稱長八

一説二代目一蝶ハ八丈島ニテ出生ス故ニ逢トキ
共ニ江戸ニ具シタリ是ヲ島一蝶ト云ト云ヘリ

二男

一蛸

俗稱多賀百松
後瀧内ト云

一舟

一舟男
川

一舟ハ門人ナリ養子トナリテ師家ヲ繼
名信種、號東窓翁、俗稱蠟五郎、

明和五年正月廿五日没ス靈乘院ニ葬ル

門人

一水

一蝶晩年ノ門人

門人
一蜂

號春窓翁

一説ニ云一蝶ノ子
多賀長八郎信勝號一蛸

門人現

高 嵩 谷

別號屠龍翁
號一雄

嵩溪宣信

一蝶の畫、狩野安信の門人なれども、狩野氏にて是を鑒定せず、骨董畫とい
やしめて不用町畫となりしゆゑなり、土佐の又兵衛是に同じし

或書に曰、元祿の比、五代將軍家綱公（常憲院殿と申す寶永六年薨去）好色に
耽らせ玉ひ、吹上御庭にて、御遊興に美を盡し玉ふ、第一の御寵愛にて、三の
丸お傳の方と申、君の御心に叶ひける（阿傳の方は至極小身の十五倭一人扶
持黒鯁白須才兵衛娘なり、后年に至り御旗本に昇進して、一度朝散太夫白須
遠江守に任せられたり）此お傳の方小鼓の上手にて、公御謠遊はせは御側に
て一調を打つ、或時は吹上御庭の池に舟をうかべ、公棹さし玉へは、お傳の方
は鼓をしらべて樂み玉ふ、是平日の事にて不知人はなし、其比多賀朝湖と云
畫師、百人女臈と云繪を書て、貴賤の姿畫を寫し、其中に世上専ら風聞ゆゑ、
舟中に鼓を打、棹さし謠玉ふありさまを、うつくしく書たり、此事誰か公に謁
奉りけん、立所に奉行所より召捕れて入牢す、罪の表は朝湖御制禁の殺生を
好み、鳥を取魚を釣ける御咎にて遠流仰付られける、朝湖願により配處へ繪

此説は實に齊東の野語なり一蝶か罪を得しは彼の平生の放蕩不檢より出たとなり其説は詳に龍溪小説に載たべし

具持參御免被仰付、配所にて一子を設けしを島一蝶と云、后御赦免ありけり、百人女藹の爲、お傳の方舟遊ひの体、至極の出来にて、御咎に逢しは、其業に依て刑せらるゝ事、本意にも近かるべしと、憂ふる色もなかりしとなり、百人女藹の繪は、我心にもいみじく出来しと思ひしが後に圖を書改めたり、今は十が七八は傳はらず、英一蝶と名を改て淺妻船と云繪を書り、鼓を持、舞裝束の白拍子船に乗たるは、以前の圖をやつせしものなり、當時英一蜂など専ら此圖を畫く、一蝶淺草寺境内にて千幅繪を書し時も、人々是を好みけるとかや

淺妻舟の賛に云、あだしあだ波、よせてはかへる浪、淺妻船のあさからぬ、嗚呼またの夜は、誰に契りをはかせて色を、枕はづかし、うらみがちなるわが床の山

後水尾院御製

今宵寝ぬ淺妻船のあさからぬ、契りをたれにまたかはすらん

替の趣異なり、隆達が破れすげ笠しめ緒のかつら、永く傳り有り、是から見れは、あふみのや、あだしあだなみよせてはかへるなみ、あゝ、またの日は、たれに契りをかはせて色を、枕はづかしそれとても、世の中うらみがちなる我床の山と有り、世にしる所なり

此英一蝶が百人女鴈の繪をもらして後、洛陽の西川祐信と云浮世繪師、百人女鴈品さだめと云好色本を書きけるとう以上

北窓翁退筆塚記

近代繪事之巧、莫北窓翁若焉、其氣象之豪放、筆力之遒勁、足以追蹤於古名人、而新奇洒落、其所獨得者也、翁姓多賀氏諱信香、一名朝湖、又有曉雲翠蓑隣樵等之別號、考曰白庵、諱某、京師人也、翁幼遊江戸、某侯嘗愛其穎悟、使之學畫於牧心齋先生、居久之、盡得其筆法、時又戲倣岩佐重起菱川師信、而畫時世風俗有春蠶吐絲雲行水流之姿、而翁之名籍甚、元祿中坐事、配流於三宅島、因曰、一蝶は小歌の作なども多く、自畫賛の句、枚舉すべからず、松の葉（元

是は全文には
あらず

祿十六年の板行、小唄を集めたるものなりしもの、めと云小唄は一蝶の作なり、洞房語園には、みじか夜の早歌（一名）かやつり草と號て、是をのせたり、淺妻船の賛も其比節を付てうたひけるにや、松の葉（後編を松の落葉と云）の端歌の部に載たり、寶永の比、吉原つれ／＼草と云物に、かやつり草の朝湖が歌こそ、又あはれなる事ねほかるめれ云々、或説に一蝶聲よくて小唄をうたひけるよし、老人になりても紀國や文左衛門などに付て、廊中にのみ暮したるとなれば左も有べし、三谷何某が藏する所、一蝶八丈島にありて、母の元へ謫居の趣をこまかにかき送り越したる物有り、横谷宗珉の家へのこりしものなりとぞ（以上追考説）

英一蝶四季之繪跋

夫大和畫はそのかみ土佐刑部太輔光信がすさみに、堂上のうやく敷より、田家のふつゝかなるさま、岩木のためすまひ、やり水のめいぼく、これにはじまりて、末々にながれ、予が如きつたなきまで是をもとゝす、近頃越前の産岩

一本に三宅島
とあり

佐の某となんいふもの、歌舞妓白拍子の時勢粧ひを、おのつから寫しえたり、世人浮世又平とあた名し、久しく世に玩ふに、又菱川師宣といふもの江府に出て、梓におこし、こぞつて風流の目をよろこばしむ、此道余が學ふどころにあらずといへども、若かりし時、あだしあた波のよるべにまよひ、時雨朝がへのまばゆきも、いとはざるよろほひ、岩佐菱川が上にたゝんとを思ひて、はかなきうき名のねさしのこりて、はづかしの森のしけきと草ともなれり、さるが中にあたりて、謫居さすらへしと十とせあまり二十とせに近きを、ありかたき御惠の、めてたきもとの都に歸り來ぬ、ある人むかしの筆の四時のたはれ書を、ふたゝび予に見す、其比は心たくましく眼すゝろに、髮筋を千筋にわくるごとく、さも事たらざりけらし、しかし今の世の有様にくらふれば、髪のとどろきをこえず、ふり袖大路をすらす、ただあまさかる田舎をふなの姿書とも思ふへからん、螢星うつりかはりて、此一卷をみると、浦島が七世のむま子に逢へるためしにすぎて、かつよろこびをそふるの心にて、これがた

めに跋す、英一蝶書、(一蝶翁の作、賛辭多しといへども、諸書に出たれば爰に載せず)

按るに、多賀朝湖、吳服町一丁目新道に住せしに、元祿五寅年十二月、三宅島に流さる、時に、歳四十六なり、寶永六丑年九月御赦免、深川に住す、是諲居より歸りての文なり、享保九辰年正月十三日没(以上類考)(深川藪の内に一蝶寺と云あり)

湯原氏記云、元祿七年四月二日、從桂昌院様、六角越前守爲御使被遣之、金屏風一雙、吉野立田の圖、多賀朝湖筆、本願寺へ同一雙、大和耕作之圖、同人筆、新門へ以上

○西川祐信(元祿より寛延まで没年□□)俗稱右京(初祐助)京師の人なり姓藤原 西川氏號自得齋、一號文華堂、稱大和繪師、世に西川流と云

京都に住、始め狩野永納門に入て、(法眼永眞、延寶の頃安信門人、縫殿助永納

字伯受、一陽齋梅岳堂西邑居翁と號す。畫を學び後一家を爲し、寶曆明和安永の比大に世に行はる、中興刻本仕女大和繪の祖と云へし、上梓する繪本數百部あり、古今比類なき妙手なり、浮世繪師の名譽なるへきか、春畫は此人より風俗大にひらけたり、百人美女とて雲上高位の尊きより、賤のいやしき迄、各其時世の風俗を寫し分たり、後又是を春畫にかきしかは罪せられしと云、筆意骨法、狩野土佐の二流をはなれず、悉く畫法にかなひし浮世畫師は此人に限れり、或人の藏書に祐信畫の事にて罪せられし事を書たるものを見たりしが、書名を怠れたり、西川の事、委敷ありし、なほ後にしるすへし

繪本百人美女 同倭比事 同好色玉簾（畫名西川祐助祐信筆と有） 同

好色百人美女（西川祐信筆）

其他枚舉すへからず、亦彩色の妙手なり、肉筆の繪卷物等、世人専ら珍重す、近世東都にては師宣よりも、祐信の畫は價貴しと云

按に板刻本は夥敷あり、八字屋本にて祐信が初心の頃、畫きしと見ゆるも

原注此頃畫本
ていさい紺糸
表紙に金泥書
あり、大本小
本横切多し、
箱入も多し、
近世文化頃迄
の好色本の如
くなりし

の多し、畫名は記さるれども此人と見ゆ

或書に曰、西川祐信は浮世繪枕畫好色本の達人と云れし、ある年百人女蒔品定といふ大内の隠し事を畫き、其後好色雙々圖といふ雲上のすかたの枕繪を板刻す、百人女蒔のつがひ繪はやん事なき方々の枕席密通の体、清涼殿の妻隠れ、梨子壺の隠し妻、萩の戸細の別れ路、夜るの殿の妻ひかひなんと、種々玉簾の中の隠し事を畫しと、公聽にもれて殿敷御咎を受、板行を禁せられて、斷けると、世の人の知る所なり、其比より以後好色本賣買を止め玉ひしを、ひそかに商ふとは成し、祐信も一蝶が跡を踏^かて、期^かの如く成とを云傳へしと云々

○橘守國（享保比の人延享中没す）俗稱惣兵衛 浪花の産なり 姓

橘 □ 信 號後素軒

狩野探山の門に入て業を受、（探山守信鶴澤氏、探幽門人大坂の人なり）後一家の畫法を以て世に雷名す、狩野流の骨法を失はす、刻板の畫に妙を得たり、

新類考に守國は橘村氏一脈に名は有信とあり
原注守の一字を名のるものは狩野家免許の弟子なり

精密奇巧、此人より起る、刻する所數種、天保の今に至る迄盛に世に行はる、書畫ともに善す、文學も博識の秀才なり、故に世の畫師の爲に廣く畫法を傳へ、粉本に乏しからざらしめんとて、精力を費し圖を工み、傍に其意を記して是を板刻せしむ、畫本の著述古今に比類なし、其名手世に知る處なり、土佐を始、倭繪の名家多しといへども、其業を己に知るのみ、守國は委く人の爲にせし故に、板刻畫の汚名を受たり、畫道に志さし有ども、書籍を見ざる俗家のものゝ爲には、笠翁が畫傳をも委しく平假名にしるして其意を得せしむ、倭漢畫法の奥義を極め、其業に達して畫本をあらはし、諸職の助となし、是が爲に世上に其業の力を得る者幾ばくならん、皆此翁の丹誠に依れり、尋常の浮世繪師に列する人にはあらずといへども、板刻の畫に名を得たれば、姑く爰に舉ぐ門人多し

門人に國雄陵天齋 俗稱酢屋平十郎あり此人名を好まざるが故に、世にしられす生涯を困窮して終れり落款して世に遺せる畫もなければ人其名を

ゑらず、古來かゝる類の後世に傳らざるもの多かるべし、世人多くは目を
賤み耳を貴べると歎かはしき事ならずや

毛詩圖譜（倭天齋國雄畫）刻本世に行れたり

守國筆繪本

繪本通寶志

繪本直指寶

同寫寶袋

同鶯宿梅

同故事談

同唐土訓蒙圖會

○雛屋立圖（立圃の傳諸書に載て人の知る所なれと爰に出す）野々口

氏 稱雛屋 俗稱紅屋庄右衛門（京師人）初名親重（明暦の頃の

人、寛文中没す年七十二）

立圃は書畫を能し俳諧に名あり、風流の一奇人と云へし、畫は土佐氏の門に入たり醒世翁曰、専ら浮世繪を書たり、醫師中川喜雲作の草雙紙のさしゑ、多くは立圃なり、許六が歴代滑稽傳に雛屋立圃は畫をよくす京童といふ名所記、自畫なり云々、上り竹齋の畫も立圃なり（類考追考）

○蒔繪師源三郎（元祿の頃の人）

俗稱□□

醒世翁曰、元祿三年の刻本に此名あり、西鶴が作の讀本さしゑ名をあらはさずといへども、多くは此人の畫なり、（以上追考）

人倫訓蒙圖彙（源三郎畫）

○月岡丹下（天明六年の頃没、年七十七歳）俗稱□□（浪花人なり、江

州の産）名は昌信 號雪鼎 一號信天翁

高田敬甫門人、大坂の春畫の名人なり、又印本の畫本多し、枚舉に遑あらず、按るに、丹下彩色の春畫大巻物を見たりしが妙手なり

○羽川珍重（享保中江戸人）沖信 藤永（門人か羽川と有り）

新類考云珍重ハ本姓眞中氏埼玉郡川口村の人にて俗稱を太田辨五郎といふ寶曆四年七月没年七十餘

谷中感應寺の天井、龍と天人は、羽川藤永と畫名あり珍重門人か享保の比の浮世繪師なり、芝居繪本吉原細見記のさしゑ、赤本の繪等多くかけり（以上類考追考）

三馬云珍重門人に羽川和元あり、附録云、珍重は曲亭翁の伯父のよし

○野々村治兵衛（刻板の繪本世に多し）

○下河邊拾水（天明の頃の人）俗稱□□（京師人なり）

此人狩野家の畫風を學ひて近世の上手なり、板刻の畫本多し、祐信守國が刻本の筆意に似たりといへども、大同小異あり

増補頭書訓蒙圖彙十冊 繪本やしなひ艸（天明四年板洛西雙立書、畫下河邊拾水子とあり）繪本をしへ艸

其他多し、書名をわすれたり、追て書加ふべし

○長谷川長春（天和貞享の頃の人）俗稱□□（京師の人）

京師の浮世畫師なり、好色旅日記に今の長谷川吉田が筆にもなるまいと書たるは、此人の事か、同時大坂に長谷川典之丞と云あり、是は雪舟の末孫と云（以上類考追考）

○吉田半兵衛（貞享中の人）俗稱□□（京師の人なるか 號姓氏共未詳）

無色軒が序云、いはでの山の岩つゝし、云ねと色に通るものは、吉彌結びの長き契りをかはし、あるはすげがさの深き思ひをしのすゝき、ほに出てよりも、吉半よしなかな染のるめ盡すとあれば、師宣同時の人歟とれもはる、長谷川長春同時の浮世繪師なるべし、好色旅日記に長谷川吉田とかきしを、見れば、其比流行の人とれもはる

好色訓蒙圖彙（貞享三年の板、畫師吉田半兵衛と有り）

其後江戸にて再板せしは師宣の畫なり、其後板刻せしは祐信なり、是を貞享訓蒙といへり、次篇に委しく記す、畫名は數度見たれども、外題を失す

○近藤清春（正徳享保の比の人なり）俗稱助五郎江戸産なり

近藤助五郎清春と畫名を記し、金平本赤本に多く有り

三馬按るに、清春は吉原細見記、并芝居狂言本等に、自筆畫にてあまた開板せり、委く別に記す

○鳥居清長（寶曆より見ぬ文化年中没す行年□□）俗稱市兵衛、一説

新助、關氏（江戸の産なり、本材木町一丁目に住す）

鳥居市兵衛清長は鳥居三代目清満の門人にて近世の名人なり、江戸錦繪の祖と云へし、始菱川るとき昔畫の風俗なりしが、中比より畫風を書かへて一家をなせり、師清満の實子、畫を學ばざれば、姑く相續して芝居看板畫をかけり、彩色摺畫本浮世美人錦繪世に行れて夥敷彫刻し、枚舉するに遑あらず、其一二を爰に誌す、鳥居相續第一の妙手なるべし

繪本物見が岡三冊 繪本

委くは世人の知る處なれば略す

鳥居氏

三馬云、元禄十年板好色大福帳五冊、諸師ノ名有り
庄兵衛ノ元祖清信ノ俗稱也鳥居市兵衛清信ト書タル諸本多シ

元祖清信

俗稱 庄兵衛

住吉 難波町

元祿享保比ノ人

清信門人

清重

小網町
市川海老蔵似顔畫の
上手

二代目
清信男

清倍

俗稱 □ □

住居 □ □

清忠

米澤町角
彩色浮世畫師

三代目

俗稱半二

清満

芳町三味線師

清經 門人
俗稱 □□
住居 □□

清長門人

清勝

高砂町

清次

同

四代目

俗稱新助

清長

近頃鈍繒彩色ノ名手也

清久

小松町

清定

花房町

清廣

清満實子

講不學和泉町ニ
住ス縫箔屋傳世

清時

清政

清之

清元

五代目

清峯

清満ト改ム清長門人也齋政ヨリ
今至天保住居和泉町

清長は江戸畫の祖といふへし、初菱川の昔畫風俗なりしが中頃より畫風を
書かへしなり、其後さまざまに變化せしかども、江戸歌舞妓の畫看板は、今
猶鳥居風に畫くとなり、清満清信清經ともに一枚繪草紙をかけり

三代目清満の實子は浮世畫をかゝず、縫箔屋を業として和泉町に住す、仍之姑く看板畫を相續せり、其縫箔屋の男あり清長門人となり畫を學ひ、清峰と名のる今二代目清満と改めて三芝居番附看板を畫く、是則三代目清満が爲には實孫なり

清峯は文化の始より文政の始め迄凡八九年の間、錦繪草雙紙（合卷といふ繪表紙の三十丁もの文化三四年比より専ら流行す）の類浮世美人繪等多く板刻して世に知る處なり、歌川豐國の畫風に倣へり、清長物故してより芝居の看板番附畫を受繼て清満と改む、板下畫は委く止たり

鳥居流の繪は江戸大芝居看板番附を畫きて一派をなせり、今猶畫風を改めず、古き草雙紙等狂言を寫し、詞書を加へしは鳥居流の繪なり、俗に鳥居瓢箪足と云て、猷役の手足ひようなんの如くに畫くは、元祖清信の比より行れたるものなるべし、芝居看板にはさまく古實ある事なりとぞ、追て別記に委しく出さんとす、

此鳥居氏の系圖は、類考并附録と大同小異あれば、姑く三馬翁の意にもとづき、附録の異同を正さず

○奥村政信(享保の頃) 俗稱本屋奥村源六(江戸通鹽町に住す、一本に油町書肆なり) 號文角(おやま繪師とかたがきあり) 芳日堂 丹鳥齋

文角政信は自ら日本繪師とかけり、朱にて瓢箪の印を用ゆ、漆畫にも多し、鍾馗の畫を能かきて眼に金箔を置けり、俗に浮繪と云て名所其外牧狩の圖、曾我十番切等、遠景の奥深くみゆる圖を、板行にせしなり、其比は大に流行す紅畫の始めなり、淺草に出し志道軒の容を畫くに妙なりと云へり

○奥村利信

○奥村文志政房(一枚繪の草雙紙に多くあり)

○西村重長(享保の頃か) 俗稱□□(住居通油町)

○石川豐信(寶曆頃の人) 俗稱糠屋七兵衛(旅人宿小傳馬町住す) 西村

重長門人なり

轉信は石川推
壁の父なり號
を秀師といふ
天明五年没す

寶曆の始め比紅繪に多し、此人一生倡門酒樓に遊ばず、しかるによく男女の風俗を寫せり、一枚繪に多く畫本もあり

○鈴木春信(明和頃の人なり)俗稱□□(居住兩國米澤町角)號湖龍齋、江戸産なり西村重長門人と云)

鈴木春信は浮世美人畫に名ありて一時の聞人なり、吾妻錦繪と稱する者の祖とす、畫本小本の差畫等多し、此頃の畫本は細かき麻の葉の表紙に紅唐紙の外題をはり袋入なり、明和の初より吾妻錦繪を畫き出して、今に是を祖とするは其頃初春略曆大小の摺物、大いに流行して、五六度摺りはじめて出來しより、工夫して今の錦畫とはなれり、春信一生歌舞妓役者の畫をかゝずして云、我は大和繪師なり、何ぞ河原者の形を畫くに堪んやと、其志かくの如し、明和六年の比、湯島天神に泉州石津笑姿開帳有し時、二人の巫女眉目のよきを擇みて舞しむ、名をお浪おはつと云、又谷中笠森稻荷の茶屋鍵屋の娘おせ

ん、浅艸楊枝店柳屋仁平次娘に藤の姿を錦書にゑがきて出せしに、世人大にもてはやせり(以上浮世繪類考)

小本書本春の雪 同春の友 同武の林(春信筆書本なり) かさもりおせん 鈴賣土平も一時のものなり 銀杏のおふじといふは浅艸なり
繪本諸藝錦 同花かつら 同さゞれ石 同千代の松 同八千代艸 同浮世袋 同春の錦(右春信筆なり)

三馬按に門人某橋本町に住て二代目春信となる、後年長崎に至り蘭書を學ひて再び江戸に歸りて大に行る(鏡書の事等、別記に記せり)

○懷月堂(浅艸諏訪町居住す) 俗稱源七 號安慶

正徳四年の三月、奥女中江島殿一件にて、生島新五郎遠島の時、共に暫く伊豆の大島に謫居すと云、木挽町山村座欠所となりしは此時なり、享保中の人、世事談に見ゆ、姓名詳かならず、今折々其繪を見るに懷月堂とのみあり、(以上類考追考)

○珉江 俗稱□□

寶曆明和の比、元縫箔師、後浮世繪師となる、五文字點式、おほく此人の畫なり、職人盡の畫本に、摺込の彩色を工風して、大に世に行る(以上類考追考)

○川枝豐信(享保中の人京師の人なり) 俗稱□□

享保十六年の板、朗詠狂舞臺と云本の畫者なり

○阿らう

享保中の名畫なり、山崎氏の姨なり、畧傳は世事談に見ゆ

○富川房信 俗稱山本九左衛門(大傳馬町二丁目に住す繪雙紙問屋なり) 吟雪と云

錦繪雙紙などに出たり拙き方なり(類考醒世翁曰、富川房信は大傳馬町二丁目山本九左衛門と云、繪雙紙問屋の主人なり、家衰へて後に畫師となれり、房信の子を長兵衛と云、板本を摺て業とす、又娘二人有り兄弟三人共今存生す、此山本九左衛門は古き本屋にて貞享板江戸鹿子にも見ゆ、房信が代に斷絶せり、

(摺職人に山本長兵衛あり本所横綱町)

○一筆齋文調(住居龜井町)俗稱□□狂歌師 頭光

文調は男女風俗の流行を畫き或は役者畫もかけり、拙き方なれども板下畫に出たり(類考)附録に曰、文調は役者畫の上手、二代目八百藏の顔をよく似せたりとあり

○柳文朝 俗稱□□(住居通油町南新道)

文朝は狩野流の畫を學び浮世畫をかけり、儀太夫節を好て朝太夫門弟なり、二代目大谷十丁の似顔の上手なり

三馬按、柳文朝門人に文康あり、俗稱安五郎、人呼て文康安といふ、老人にして今尙存す(文政元戌亥年三馬が書入なり)

深川靈巖寺に碑あり、今二代目柳文朝は尾張町の邊に居住すといふ、吳服屋仕入物なさに畫名見ゆ、文化文政の頃なり

○鳥山石燕 俗稱□□ 豊房

鳥山石燕は一時の聞人なり、繪本あまた出せり、委き傳追て考べし

繪本百鬼夜行(三篇迄)十五冊 水湖畫傳三冊

○細田榮之俗稱 ☐ ☐ 細田氏(始濱町住、後本所割下水) 姓藤原 時當

號治部卿鳥文齋

天明より、寛政の間、浮世繪の風俗を能寫して、錦繪に美人傾城畫多し、専ら世に行る、後故有て姑く筆を止む、狩野流の筆意を學んで今猶彩色繪多し、門人に榮理、榮昌、其外多くあり

○湖龍齋 俗稱礪田庄兵衛(住居兩國藥研堀) 後法橋となる

浮世繪を能す、東都藥研堀の隠士と畫名を記せり、法橋となりてより板下畫をかゝず(小川町土屋家の浪人なり)

按るに、錦繪を細長くつぎ、吉原遊女畫などをあかきて表具し、俗に柱かくしと云、聯の如くにしたる繪多し、此頃専ら流行せしものなるべし

○寫樂(住居江戸八町堀) 俗稱 ☐ ☐ 號東洲齋

新類考に俗稱
齋藤十郎兵衛
とあり

歌舞妓役者の似顔を寫せしに、あまりに眞を寫んとて、あらぬさまに書なせしかば、長く世に行はれず、一兩年にして止む(類考)

三馬云、僅に半年餘行はるゝのみ 五代目白猿 幸四郎(後宗十郎と改)
半四郎 菊之丞(富十郎) 廣治 助五郎 鬼治 仲藏の類を半身に書き
たるを出せり

○戀川春町俗稱倉橋壽平(住居小石川春日町)

春町は鳥山石燕の門人なり、白畫作の青本あり(草雙紙の事なり五枚ツ、綴)小石川春日町に居る故、勝川春章が名を藏れにされるなり(類考)

三馬按、二代目戀川春町と書たる畫工ありしが、近年改て二代目歌麿となる、春町歌麿共に石燕の門人なり

○窪 俊滿(居住龜井町) 尙左堂と云

俊滿は狂歌を能す、書を北尾重政に學び、後春章に學ぶ、狂歌摺物繪寫眞の畫に妙なり、左筆にてかけり

三馬云、俊清職作あり、南陀伽紫蘭と號す、青樓油汚 玉菊燈籠の辭と名くる小冊子、其他草箋紙四五種あり

○春潮（明和より文政までの人） 俗稱吉左衛門 後俊朝と改む號吉

左堂

鳥居清長の筆意をよく襲^{まね}たり、錦繪また草箋紙に多し（類考）

三馬云、春潮浮世繪を廢して後俊潮と改む、吉左堂と號す、文政四辛巳年今尙存す長壽の人なり、傳は別記に錄す

○珠雀齋（年曆姓氏未詳）

○歌舞妓堂 俗稱□□

役者似顔のみ畫きたれども、拙ければ半年ばかりにして行はれず

○宮川長春（正徳享保頃の人） 俗稱□□（江戸産） 菱川流の畫なり

宮川雪溪曰、尾張岡宮川村人正徳年間、江戸兩國廣小路に住、土佐守門人、菱川の風を慕ふ、長春は狩野家の下請にて、日光御用を勤む、狩野某甚宜から

新類考に役者の似顔をあが
同上かふを堂
名は艶端とあり

ぬ人にて手間料を一向遣はさず、宮川立腹、度々催促に及び、遂に口論となり、宮川を多勢にて打搦し、其上に荒縄にていましめ芥溜に入置く、宮川方にては歸宅せざるゆへ、其子出尋ねて父を芥溜よりたすけ歸る、性命別條なしといへども、老人の事故、足腰をいため難澁に及ぶ、其子大にいかり、一刀を提けて、狩野方へきりこみ、當人は勿論、外門人三人きりころす、依之、其子は死罪、長春は流罪、狩野某は欠所なり、其後、年を経て寶曆明和の頃、宮川春水といふ門人あれども、宮川は上に憚る氏なれば勝宮川と號せしとを

宮川 春水

俗稱□□大和繪師ト云芳町住享保頃ノ人
好勝宮川ト改ム

春水

俗稱藤四郎 深川 後芳町住

門人
薪水

門人
春章

春童

林森道號醫德齋
門人カ

一本に春童の
名なし

○勝川春章（又勝宮川氏とも）

是は明和の頃歌舞妓役者の似顔を畫きて大に行はる、五人男の畫をはじめとす、そのころ人形町林屋七右衛門と云へるものゝ方に寓居して、畫名もなかりしかば、林屋の請取判に、壺の内に林といへる文字ありしを押してやりたり、故に人呼て壺屋といひ、弟子春好を小壺といひき、武者繪をもよく畫きし

三馬按、春章號旭朗齋、號酉爾、俗稱祐助、書畫をよくす、門人數多あり、傳及系圖等委く別記にあり

○小松屋（俗名三右衛門、後百龜といふ）

明和の頃大小の摺りものゝ畫多く小松屋のかけるなり、西川氏の筆意を學びて春畫をもかけり、肉蒲團ぬくめ夜具等の本あり、元飯田町の藥舖なり

活東子云、此二人本篇にもれたれば、類考より抄出して書加へつ

○勝川春英 俗稱□□（住居新泉和町新道）號九德齋

始め春章門人なり、後一家をなせり、武者繪に妙を得たり、寛政享和の比專

大小は略曆なり

ら錦繪多く發行せり、操芝居の看板書をかけるは、世の知る處なり、自然一家の筆意をあらはし、書道の妙を得たるとは一蝶窩谷に匹敵すべし然るに生涯浮世繪に終りしはれしむべきとなり又一流の狂書をかきて九徳風と云、彩色摺書手本、武者書手本、繪雙紙數種あり、近世の名人にて春章歌麿も不及處多し初代豐國は此書風を本學ひたり

繪本弓袋

繪本□□

忠臣藏十一段續の屏風、火事場火消はたらきの書卷物、其他人の畫かざるものを多くかけり、

因云、麴町高山田某に逗留して屏風繪卷物を畫けり、書法に奇巧ありし人にて、古きをたつねて新しき圖を工むと妙なり、又儀太夫節をよく語り、三絃をもよくひけり

門人

春 亭

春 扇

春 徳

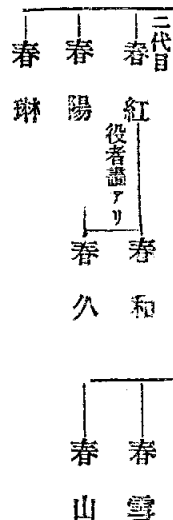
俗稱千太郎 十軒店
武者藝アリ

春 玉

春 青

春 洞

俗稱政藏大政ト云左筆
共ニ書ク



後蓬山米之ト云武者譜アリ廻町ニ
住メ後赤坂へ移ル

○勝川春好 俗稱□□(住居長谷川町)

春草の門人にて小壺と云り、浮世畫役者畫多し

三馬云、春好早世にあらず、四十五六歳の比、中風を患て業を廢す、後年麻布善福寺に通世して在しが、焉馬翁の需に應して、市川白猿の肖像を、左筆にて畫たる事あり、其圖今に白猿一首に見ゆ(以上) 二代目勝川春好は春扇なり別に記す

○勝川春亭(寛政享和文化の間の人) 俗稱□□(居泉和町)

春英の門人なり、武者繪を善す、浮世畫役者繪一時に行はる、艸箋紙を多く畫く、繪本も二三種ありし、壯年にして病の爲めに業を廢し、其居所を知らず、惜むべし、

新類考云、歌
舞妓年代記は
春亭の畫なり

按るに、春亭は春英が高弟なるべし、世に發行する處の草雙紙錦繪、同時のもの多し、後に豐國の畫風を畫きて、役者錦繪も歌川風にかきしなり

○勝川春扇（享和より文化文政までにて没す）俗稱清次郎（居始麴町貝坂、淺草御門前、又神明町へ移る）號は始春琳と云（等琳門人）春扇と改め又（二代目）春好と改む

始め雪山堤等琳門弟なりしが、後春英に學びて春扇と改む、文化の始め、東西葺南北と云作者、源五郎鮎と題せし雙紙を作り、春扇始て草雙紙の下畫を造り、（板元芝神明前山田屋三四郎初めの板元なり）大に行はる、是よりして一途に浮世畫役者畫草雙紙を書り、此比神明前の繪雙紙問屋、伎を取立ん事を挑あらそひ、新板日々に多く發行す、僅の間なれども豐國大に衰へしとありし、讀本も一二種畫かけり、二代目春好と改名し、板下畫を止めて芝神明町に移れり、妻も氣流の者にて、草雙紙の作を年々發行す、作名月光亭笑壽と云へり

按るに、繡像讀本は東里山人作源平染分草と云し五冊縫山翁作、橋供養二編五冊なり、後陶器の焼付書をかきて板刻畫とば書す、其比は酒杯繪猪口と云しもの流行の始めにて、専らに是をのみ業とせり、門人に扇里といふものありき

○春川榮山 俗稱□□

○春川五七（江戸小石川の人なり）

文化の末より京師に住す、榮山の門人なるへきか、未詳、京小原八坂の邊りに住けるにや、江戸に在りし比は、役者の細かき繪を書き、板刻せしと見へたれど一二種に過ぎず、其後書名を見ず

○北尾重政 俗稱左助（住居初大傳馬町二丁目、后根岸大塚）本姓北

畠（江戸の産なり）號紅翠齋、一號花籃齋

北尾重政は書畫ともに善す、就中板下に妙なり、武者畫花鳥に委し、近來江戸書肆繪變紙問屋、藏板の庭訓、或は往來物、百人一首法帖の類、書畫ともにか

原住壯年の頃
は鳥居風の襦
をかけり其時
代はすべて鳥
居風を慕ひし
なり

新類考に文政
十二年没す年八
十二

けり、又曆の板下は、重政老年迄も書きしなり、板下の筆耕は、其頃三都に重政が右に出るものなかりし、花鳥の寫眞、武者畫本等數部を筆す、錦畫雙紙の繪尤多し、

繪本子育草小本三冊 同譽の魁

後年（文化の初頃か）二代目北屋重政と稱せる者は美丸と云し人なり（新乗物町の川岸、俗稱□□）

○北尾政演（重政門弟、文化中没す）俗稱京屋傳藏（住居京橋南一丁目）

姓岩瀬 字伯慶 本姓灰田 又號醒々老人 號律齋 作名山東庵

京傳 初名甚太郎（兩國回向院に墓あり、淺草寺筆塚の碑銘、家

弟京山人撰文）

山東京傳は書畫ともに善す、戯作に高名なると、世に知る所なれば爰にしるさす

○北政重美（重政門弟文化中没す）俗稱三次郎（居初小綱町、後住

吉町裏川岸、後れ玉が池に住す、姓鍛形氏 號杉翠 後號薰齋

紹眞と改

政美近世の名人なり、狩野家の筆意を好て一家をなす、東都の繪圖を委敷一と眼に見るやう、かくとを工風して、大に世人にもてはやさる、神田明神に、其江戸繪圖の額を奉納せり、諸職の爲に繪本手となるへき物をあまた畫けり、近年繪本は多く此人の筆なり、是より世に薄彩色摺の畫本大に流行す、一時の聞人なり

畧畫式（人物鳥獸山水花鳥草木六冊）畧畫苑 蕙齋畧畫 諸職畫鑑

諸職 鍛形 繪手本（此外刻本多くあり）

後松平越前侯の藩中に在て、板行發市の繪を止め、鍛形紹眞と改め落髮す、實子ハ赤子と呼ぶ今猶越前侯の藩中たり、門人に美丸と云ものありしが、故ありて政美の師重政が名跡を繼がしむ、但風畫は大ひに異りて、豐國が流なり名を相續して反て絶るにしかず

○喜多川歌麿 俗稱勇助（居始辨慶橋、又久右衛門町、後馬喰町三丁

目）號紫屋

はじめは石燕豐房の門に入て狩野家の畫を學ぶ、後一家をなして浮世繪中興の名人と呼ばれたり、男女の流行風俗を寫す事、近世此人より始まりて錦繪の華美を極めたり、自云、生涯役者繪をかゝす、劇場繁昌なるゆへ老若男女最貴の役者あり、是を畫きて名を弘むるは、拙き業なり、何ぞ俳優の餘光を假んや、我は日本繪師なる浮世繪一派を以て、世に名を轟すべしと云るとなり其意に違はず、其名海内に聞ゆ、一豪傑と云ふへし

因云、清朝の人歌麿が名を知て、其商船より長崎の人へ多く錦繪を求たり、唐までも聞へし浮世繪の名人なり、殊に春畫に妙を得たり、此人淺草の水茶や難波屋おきくの姿繪を出せり、かざもりおせん、をぐらやおふじ、なにはやおきく、三人狐拳の繪あり、繪本太閤記の圖を出して、姑く咎めを受たり、獄屋に入しが、出て間もなく病死す、おしむべし

文化年間、奥州岩城より來れるものあり、此人浮世繪を好む一病あり、元江戸の者なりしが、業わざひを旅中にのみし、南部出羽加賀能登に往來す、其比江戸にては一陽齋豐國の役者書専ら行はる此人云、遠國他郷に往ては、江戸繪の名人は歌麿とのみ云て、豐國の名をしる人は稀にもなかりしと云り、歌麿が高名なる、是にてしるべし

役者繪に、市川八百藏一世一代、おはん長右衛門の狂言をせし時、桂川の繪評判にて求さる人なかりし、歌麿は美人繪にておはん長右衛門道行の繪を出し、是に賛を書り、近世浮世繪かき、蟻の如くに這ひ出し、むらがる趣を、悉く嘲弄して書たり、今藏する人多く有るべし

歌麿に門人多し、浮世繪のみにあらず、花鳥虫魚寫眞等、精巧細密の彩色描畫本多し、此人の傳に奇說多しといへども、委しくは別記にしるす、浮世繪類考曰、始め歌麿は通油町葛屋重三郎といふ繪雙紙問屋に寓居せしとなり

吉原年中事行さいしき摺二冊（十返舎一九狂文入）

繪本百千鳥（極彩色狂文入）

同 虫 撰（極彩色狂歌入）

其他枚舉するにいとまあらず世の知る所なり

歌麿門人

菊麿

寛政ヨリ文化文政ノ人後月書ト改ム
一流ヲ書キ板下書多シ草紙アリ馬喰町ニ住ス
後年浮世書ヲ書

門人

雪麿

諱ヲ止メ作者トナル
名高シ

式麿

俗稱口小石川水道端ニ住ス
文化中没ス

秀麿

俗稱口下谷柳稻荷前ニ住ス
錦繪アリ

三代目

歌麿

俗稱口馬喰町ニ住ス
文化ヨリ天保ノ人二世徳川幕町ト云シ人也書ヲ善ス故歌麿ガ妻ニ入夫セシ也

作者十返舎一九が云、吉原年中行事は吉原の事を委しく書し文章故に行はれ
しと云ければ、歌麿は繪組ゆへに行はれしと。互にあらそひ、大に取合となり
し事ありしとぞ、是を以て其氣質を察するに、大にほこりし人なりとみゆ、没

門人

美麿

後北尾重政トナル
小川ト改メ歌川トナリ北尾ト改ム

前繪雙紙問屋云あはせ、歌麿此度は必ず病死すべしとて、各錦繪の板下を頼み込、夥敷書物なりしとぞ、其比は外に畫者なきが如く、錦繪の板下をのみさせたりと、或繪雙紙問屋の老人ものがたる

○歌川豊春（安永より文化の間、享年七十餘歳にて没す） 俗稱庄三

郎、但馬の産と云（居始は芝三島町、後日本橋、落髮して赤坂田町に住す）號一龍齋

浮世と云は洋畫の油畫に似せて障景などを寫すものなり

豊春は始め□□門人なり、後流行の風俗を畫き一家をなす、操芝居の看板畫をかき彩色に委し、寛政の比、日光山御修復の節、彼地職人頭を勤めしとぞ、此人浮世繪の妙手なり、横にかきし錦繪なと多し、類考に云、近來浮繪を錦繪に多くかき出せり、寶曆の比のうき繪に勝れりと云り、但草雙紙の類は多くかゝす（弟子に高名の者多し）

豊春門人

後年豊春は名ノリシモノアリ血脈ノモノカ文政ノ始メナリシ其後ナシ京極銀坐二丁目新道ニ住ス

豊廣

其片門前ニ住ス門人ナリ別ニシラス

七右衛門

畫ハカガズ
本所御城前ニ住ス

豐國

中橋横町川岸ニ住ス
門人多シ別ニシルス

豐久

堺町ニ住ス 芝居狂言本ヲカク
錦襦アリ 組上ケ燈籠ノ畫ニ妙ヲ得タリ

豐丸

錦襦アリ

按るに、土佐結城の操座の看板は、此人の筆にて毎度評判せられ、珍敷圖取をかきしと云り、其後春英も是に次て劣らざるものなるべし、今は春徳が筆なり春高も一兩度見しとあり

○歌川豐廣（寛政の末より文政十一年の頃没す）俗稱藤次郎（居芝片門前町）號一柳齋 江戸の産なり

始め豐春の門人なり常に儀太夫節を好て三味せん尤妙手なり、後一家の畫風をなし、筆意雪舟、或は明畫の趣あれども、元より土佐狩野の畫風を學べり、草筆の墨繪を板行して張交畫とす、尤妙なり草雙紙敵討の續物の繪此人より始り、初代南仙笑楚滿人の作なり、世に行はるゝ讀本數十部を畫く、その筆力

奇巧は近來同時の畫工に並ぶものなし、彩色畫も妙手なり、門人多し

歌川豐廣

生涯役者繪ラカカヌ浮世繪師ト云
彩色摺江戸名所編茶番

實子

豐清

俗稱金藏
畫ラ善ス錦繪草雙紙讀本アリ早世ス可惜

女子

他ニ嫁ス

娘實子

豐熊

俗稱熊吉
轉廣爲ニハ實ノ孫ナリ

門人

廣昌

駿州沼津宿太平某
筆畫二三種アリ

廣重

八代洲川岸法
武家近藤德太郎
文政ノ末ヨリ天保ノ今專ラ畫ク
錦繪草雙紙多シ

廣恒

廣政

○歌川豐國（寛政より文化年中没す）俗稱熊吉（居始芝三島町芳町堀江町上榎町川岸油座に住す）號一陽齋（江戸芝三島町の産なり人形師を業とする人の男）

初め豊春の門人なり、後英一蝶の畫風を學ひ、狩野家の筆意を旨とす、浮世繪は玉山九德齋が畫法を慕ひ、一家の筆法をなす、一時豐廣と共に行はる、當世の風俗を寫す事に妙を得たり、豐國の畫、始ての板元は、神明前問屋和泉屋市兵衛にて（泉市と云）役者切畫なり、美人繪并役者似顔、此人より行はる、中興の祖と云べし、艸雙紙合卷、讀本錦畫數百部、世にもてはやせり、一流の畫風を以て江戸に雷鳴す、門人夥し、

五十三

寶子

不學識

一陽齋豐國

直次郎

板木師

二代目

一龍齋豐國

豐國養子トナル本郷春木町ニ住ス
後歌川豐重ト改ム

初代豐國門弟

二代目豐國門弟

國政

俗稱別記ニユツル

國富

錦畫アリ

一翁齋

國滿

俗稱熊藏土器丁繪物丁芝口ニ丁
目田盛町錦滿繪双紙アリ

國兼

錦畫双紙アリ
二三種ニ過キズ

國長

俗稱別記ニユツル

國丸

俗稱別記ニユツル

國次

俗稱幸藏 銀坐四丁目ニ住
錦繪草双紙アリ

國安

俗稱別記ニユツル

國貞

同上

國直

同上

國信

作名志満山人ト云
畫作ノ草双紙多シ

國芳

俗稱別記ニユツル

國景

國

國周

□繪アリ早世

國虎

俗稱榮藏
草双紙錦繪アリ多ク出ス

國宗

國長門人
錦畫ニ三種アリ

國照

俗稱忍右衛門
錦畫ニ三種アリ

國房

錦畫ニ三種ヨミ本モアリ

國登女

錦畫アリ

此餘多しといへども板下畫を不出者零之

一陽齋筆畫本彩色摺 畫手本に年玉筆 合鏡(役者) 此手拍子(同)

似顔獨稽古 同三階興 時世教

此人の傳多しと云ども、姑く爰に畧す、別記に出す、文化文政の間、此人の似

顏書大に行はる、爰に於て豐國筆塚碑（柳島妙見境内にあり門弟より建之）山東京山撰文并書なり

或人云、豐國は其骨法豐廣に及ざる事遠し、書法劣るといへども、流俗の眼を悦しむるに妙を得たり、劇場流行の時に逢るものなり、后年迄春畫はかゝざりしが、物故二三年前より數部の春畫を出せり

○歌川國政（寛政の末より文化の始までの人）俗稱甚助 奥の會津の産 號一壽齋（居始芳町堀江町、后市ヶ谷左内坂に住）

豐國の門人なり、豐國の高弟にて二代目國政と云、畫は遙か後に見へたれ共板下を見ず始め紺屋を業とす、生質芝居を好むの一癖あり、僅のいとまあれは狂言を見物す、元より俳優の面を似せて畫くと甚妙なり、紺屋の主豐國と交り深かりしかば、其故を物語り豐國傍に招きてかゝしむるに、面体の癖を似する事豐國の及ばざると多し、則需に應じて門人となす、或時中山富三郎（世にぐにや富と異名す）の似顔を畫く其人を目前に見るか如し、其頃専ら

似顔半身の團扇繪流行す團扇問屋是を見て板下にかゝしむ、市中に出賣るに世人面部の似たる甚奇なるをもてはやし、不計利潤を得たりしかば、夫れよりして多く團扇繪を習しむ、その師豊國是に及はざりしゆゑ國政が畫くところを以て規矩とし専ら役者畫を國政に似せて、ゑかきけり、因て世人は反て國政が門人ならんと云しとぞ、後錦畫にも多く出しが、畫道に深く不入、學ふ所拙ければ人物全く不備、僅三四年にして止む、後似顔の假面を作りて、童子の爲めに賣りけり、没年を不知

新類考に名は
尙友とあり

○法橋玉山(天明より文化の人) 俗稱□□

大坂の人なり 名は□

姓は石田 法橋に叙す

近世板刻密畫の開祖たり、始め關月門人にて後一家の畫風をなす、著述の畫尤多し、畫法筆力の秀てたる事、古人に比類なし、名所圖會繡像讀本數百部を畫く京大坂の板刻畫は悉く此人なり、一時の高名妙手と云ふへし

繪本太閤記(初篇より七篇まで大に世に行はる) 唐土名所圖會(新設堂藏

板勝れて妙なり）三國妖狐傳 繪本玉藻傳

其他枚舉すへからず世の知る處なり門人多し

二代目玉山岡田修徳、文化文政の比、江戸神田に住せし事あり、板行の畫はかゝさりし、神田明神に、爲朝の圖を畫きし額あり、初代玉山の畫をよく學ひ得たるものなり

○法橋關月（天明より享和年中）俗稱□□ 大坂人なり 姓蒨 法橋に叙す

同上名は德臺とあり

始め月岡丹下の門人なり、玉山が筆意畫法を學ひ、名所圖會を板行せり、壯年にして没せしと云

伊勢名所圖會 山海名産圖會（關月が實子蒨關半天保中大坂に住す）

○法橋中和（京師の人保元平治又前太平記源平盛衰記等名所圖會を畫く）

○東野（此比同時の人と見ゆ大坂の人後奈良に住す）姓大原

○春曉齋 俗稱□□ 大坂の人 姓速見

刻板の繪入讀本を多く畫り能く法橋玉山の畫風を學ひたり

蜀
入平家實記十冊

○二代目春曉齋(大坂の人なり)

○竹原春朝齋 俗稱□□ 京都の人

秋里籬島と交り深く五畿内及諸國の名所圖會の刻本多く出せり

三馬按、春朝齋の男春泉齋あり、繼て名所圖會を畫く

○歌川國貞(文化二年頃より天保の今に至る) 俗稱庄五郎(居本所五

ツ目後龜井戸に住) 葛飾郡西葛西の産 號一雄齋 一に五渡亭

桃樹園の數號あり

國貞は本所五ツ目渡場に住す依て五渡亭の號あり、(蜀山人此號を贈りしと云) 若年の頃より浮世畫を好み自ら師なくして役者繪を書く豐國門人となり
始て藍本をあたへしにろの淨書を見て豐國驚しと云り、豐國が門に入、程な

同上名は信繁
浪華の人とあり

同上國貞後豐
國の名を續て
香蝶樓と號す
とあり

原註國貞始て
錦繪の板元は
西村與八なり

く文化の始(二三年の比)に草雙紙の板下を書けり、(山東京山始めての作、國貞始ての畫なり、妹脊山と云、江戸屋の板)夫より年毎に畫く、錦繪は中村歌右衛門大坂より下りし比(在原系圖梅若狂言切狂言於旬傳兵衛猿廻し堀川の段、二番目狂言富岡志山關出村玉屋新兵衛の狂言、數品を畫て發行す(馬喰町西村與八板元)團扇繪(歌右衛門猿廻し與次郎の畫、團扇繪を初て畫きしなり)草雙紙大ひに行れて、おさく師豐國におどらず、一時聞人となり、終に一家をなせり、畫風はよく豐國の骨法を學得たり、後に一派の筆意を以て、一蝶嵩谷か筆法を慕へり、師没して後、彌自立して、浮世繪役者似顔畫に名高く數百部の合卷草雙紙を出せり、讀本は二三部に過す、畫手本の類は未出ず、當世の風俗を寫すに妙ある事、よく豐國か畫法を學ひ得たり、門人多し、委き傳は別記に誌す

繪本役者夏の富士 役者似顔早稽古
其他數枚舉するに遑あらず

國貞門人

五風亭

貞虎 俗稱與之助
雙紙錦繪多く出リセ

貞繁 紙ヲ出セリ

貞秀 俗稱 兼吉
双紙錦繪等多く出セリ

貞幸 錦繪アリ

貞房 草紙出セリ

貞景 錦繪草紙ヲ出セリ

按るに、近頃國貞は英一蝶の畫印を用るを度々見たり、五渡亭國貞と畫名を書き、花押は英一蝶とあり、いかなる事にや、嵩谷の齋嵩陵とか云人の門に入て、故人の名跡を望むにや、役者似顔の錦繪には似付かぬ畫名を慕ひしとなり、

○歌川國長（文化の末より文政に没す四十餘歳）俗稱梅干之助（居芝口三丁目、後新橋金六町）號一雲齋 江戸の産なり

書を豐國に學ひ浮世繪を能す草箋紙二三種あり、組上燈籠或は細き細工物に組立る錦繪多く出す、其工風に妙を得たり、浮世と號する名所の繪多くあ

り、門人國宗、其餘多くあるべし、板下畫を不見、此人常に遊藝を好みて、音曲に妙なり、酒席に興を添ふる事を能す、一奇人と云へし、櫻川善孝甚幸など、一時の友人なり

○歌川國丸（文化より文政の末に没す年三十餘）俗稱□□（居始本町二丁目後浮世小路）號一圓齋 江戸の産なり 五彩樓 翻蝶庵 龍尾（俳諧の名なり）

此人書畫を善し頗る才あり、豐國の門人となり、國安と並ひ行はる、浮世繪役者畫どもに多し、草雙紙合卷錦畫、世人の知る所なり、畫法は師の筆意をよく守れり、亦風流に遊び諸名家との交り深し、俳諧をたのしみて鶯笠の門葉なり

○歌川國安（文化の始より天保に至て没す年三十餘）俗稱安五郎（居大門通村松町、又本所扇橋）號一鳳齋 江戸の産なり

幼年より豐國の門人となり、師の傍に塾生たり、文化の始め錦畫を出す、（中

村歌右衛門千本櫻忠信道行の畫あり。其後故ありて西川安信と改めしが、亦改て國安といふ、艸雙紙錦畫世に多し、畫法はよく師豐國の筆意を學べり、役者畫かきの一人なり、門人多し。

門人 安信 安(多吉)などなり

按るに、二代目の國安と稱する者ありて、板刻に見ゆ

○歌川國直(文化の比より天保の間に至る) 俗稱鯛藏(居始麴町より所々に移る后田所町に住す) 號一烟齋 信濃の産なり 一に

浮世庵 柳烟樓

始め明畫を學ひ又北齋の畫風をも好しが、壯年の比豐國の門人となり、文化の末より艸雙紙を出せり(式亭三馬推舉して取立たり三馬作の畫多し)其後錦畫讀本世に多く出し、國貞に匹敵せり、豐國の畫法を能せしかと、從來明畫を好むほどの畫才ある人なれば、一派の畫風を立んとして、暫くこれを廢せり、後天保の始めより雙紙中本などを多く出す、浮世繪一家の上手なり、門人

多し、書く所板刻に出されは、爰に載せず

因に云門人に竹庵龍子と云しものあり、粕壁宿の産なり、艸雙紙役者書など出せしとあり、文化年中なるへし、其比は國芳なども國直が家に塾生の如く居て、板刻を學ひたりし、近頃國芳が畫風は、總て取合せの器財艸木など、國直が筆意にのみよりて畫しが、當時は紅毛繪の趣を基として書くと見ゆ、北齋の畫風を慕ふは、國直が、畫風によりて學ひしゆへなり

○歌川國芳（文化より天保の今に至る）俗稱孫三郎（居始白銀町二

丁目、後に兩國米澤町）號一勇齋 江戸の産なり

豐國の門人なり、文化の比、錦畫一二種出しが、暫く止み、文政の末より水滸傳百八人の錦畫を出し（板元兩國加賀屋吉右衛門）大に行はれて、錦繪草紙年々發行す、能九德齋が畫風を學ひ、一派の筆法あり、門人多し

按るに北齋が畫風をも慕ひし故か、近世蘭畫の趣意を基とすと見ゆ

○葛飾爲一（明和に生れ寛政より天保の今に至る）俗稱□□（居始め本所横網町后數十ヶ所に轉宅す今淺艸寺前に住す）江戸本所の産なり 數號あり改名左に記す

始めは業を勝川春章に受て勝川春朗と畫名す、故有りて破門せられ、叢春朗と云り、古俵屋宗理の跡を續て、二代目菱川宗理となりたる比、畫風をかへたれど（宗理の頃は狂歌の摺物多し錦畫はかゝず）未だ一派をなさず（堀等琳の畫風を慕ふ）亦門人宗二に宗理を譲り（三代目宗理は）名を家元に返せり于時寛政十午の末、爰に至り一派の畫風を立て、北齋辰政雷斗と改む、（一説北辰妙見を信す、故に北齋と改めしと云、後雷斗の畫名は重信にゆつる）北齋流と號し、明畫の筆法を以て浮世繪をかく、古今唐畫の筆意を以て畫を工夫せしは、北齋を以て開祖とす、爰において世上の畫家（俗に云本畫師）其畫風を奇として大にもてはやされ、一時に行れて門人多く、高名の妙手と稱せらる、從來書を讀み學才あれば、戲作の繪雙紙多く、草雙紙の畫作をも板行す、作名

を時太郎可候と云り、(競春朗の頃は役者の錦繪を出せしが、北齋に至りて、錦畫の板下をかいず、狂言摺物畫を多くかけり、錦畫の風なきを以て、悉く北齋の畫風を用ゆ、但畫狂人の號は門人北黄にゆづる、北黄は板下をかいず)専ら畫狂人葛飾北齋と畫名して雷鳴す、畫風錦繪草雙紙等の尋常にあらず繡像讀本の差畫を多くかけて世に行はれ、繪入讀本此人より大に開けたり(此頃畫入讀本世に流行す、畫法草雙紙に似よらぬを以て貴しとし、讀本畫とて別に一種あり杏花園藏書浮世繪類考に云北齋宗理は狂言摺物の畫に名高し、淺草に住す、すへて摺物畫は錦繪に似ざるを貴とすと云)京師大坂より雷名を慕ひ、門人多く學ぶ者ありし故、尾州名古屋を始めとして京師大坂に至れども、匹敵する畫家絶てなし、板刻の密畫に妙を得當世に獨歩す、刊本枚舉すからず、漫畫と題して畫手本を發行し、大に世に行はる數篇を出せり、(始板元江戸麴街角丸屋甚助なりしが、故有て后尾張名古屋永樂屋東四郎藏板となれり)再たひ名を門人に譲りて錦袋舍戴斗と改め、前北齋戴斗と云、(二代目

北齋は本所の産なりしが、後は吉原仲の町龜屋と云茶屋なり、兩國回向院にて大書布袋をかけり、錦袋舎名弘め書畫會あり、大畫は十六間四方十八間四方、名古屋にては釋迦出山の圖をかけり是をも文化の末、門人北泉に譲り與へて、前北齋爲一と改名す、門人に臨本を與ふるに違あらず、是が爲めに畫手本を板刻して數十冊世に行はしむ、生涯の面目は畫風公聽に達して、御成先に於て席畫上覽度々あり、幕代の妙手と云へし

板刻畫手本標目

北齋漫畫（自初篇至十三篇） 櫛雛形 戴斗畫譜 地文雛形 北
齋畫鏡 畫本獨稽古 北齋畫叢 一筆畫譜 畫本早引 爲
一畫譜 三體畫譜 北齋寫眞畫譜
畫手本數部枚舉すへからず、僅に其一二を爰にしるのみ、委くは別記に讓
る

葛飾爲一

二代目

北齋

二代目

戴斗

門人

女子

門人柳川重信雷斗ノ妻
早世男アリ爲一實孫ナリ

女子

畫工ニアラス
早世御鏡御用ノ家ニ嫁ス

女子

榮女 畫ヲ善ス父ニ學テ今
専ラ畫師ノ名アリ

辰政ト云シ頃ノ門人

辰齋

雷斗

柳川重信ト云別記

雷洲

青山ニ住スヨミ本アリ後
銅板ノ紅毛畫ヲヨクス

北齋ト號シテ后門人

北馬

狂歌摺物多シ別記アリ畫入ヨミ本數十冊ヲカケリ後一家ノ畫風ヲナス
蹄齋ト云下谷三筋町ニ住ス

昇亭

北壽

兩齋ヤゲンボリニ住ス
蹄齋山水ノ遠景多シ

北溪

別記アリ赤坂ニ住ス
摺り物ヨミ本多シ

北岱

淺草ニ住ス
入り物ヨミ本多シ

北鷺

入り物多シヨミ本アリ

蘭齋

北嶺

本郷ニ住ス
ヨミ本雙紙多シ後唐畫師トナル

東南西

北雲

大久保五郎トアリ
スリ物蹄齋一二種アリ畫本アリ

載岳

北泉

別記ス
ヨミ本畫本多シ

斗綱樓

墨僊

名古屋ノ產
畫本ヲ出ス

北洲

大坂ノ產
蹄齋ヨミ本アリ

其他數百人板刻の書をかゝざるものは爰に載せず、しかれ共僅に刻本を書きし人には洩たるものあるべし、(北齋は俳諧を好み、川柳狂句をよくす)

傳に曰、爲一翁は曲書を善す(升玉子德利宮すべて器械に墨をつけて書をかゝ、左筆も妙なり、下より上へ書き上くる逆書をかけり、中にも爪にて墨をすくひかく書は勝れて妙なり、筆にて書たるが如し、書く處をみざれば其實をしるべからず、刻本の春書をよくかけり、一派の風ありて情深し)彩色に工風をこらして、一派の妙を極めたり、總て惣身に書法充滿したる人にて、一點の戲墨も書をなさずと云事なし、嵇代の名人なり、倭漢の書法に委し、骨法自ら宋明の筆意ありて、尋常の畫風にひとしからず、眞を寫すに一家の筆法畫体悉く具るといへども、能其眞に似たり(狩野流にても似て似ざるを畫法の第一とす、畫中不全して書をなすを以て善とす)自ら云、數年諸流の畫家に入其骨法を得て、一派の筆法を試み畫道の業に於て會得せざるとはなしと云り

香具師の看板畫より劇場操の看板、油畫蘭畫に至る迄、往々新規の工風を出し刻本の細密、定規引きの奇巧なる、一家の畫法を起せしは尤妙なり、他郷に至るも畫者皆門に入て業を學ぶ、京師浪花は悉く翁の畫風を學ひて名を改めずといへども、門弟にならぬはなし（爲一翁轉宅すると一癖なり數十ヶ所に住を替たり）浪花發兌の繪本を見てこれを知るへし、紅毛よりの需に應じて二三年の間數百枚を送りしに、蘭人も大に是を珍重す然るに故有て是を禁せられたり、天保の今に至るまで六十餘歲筆法少も衰へず、老年に及んで彌筆に潤ひあり、近年錦畫を多く出せり（諸國山水、花鳥盡し、三十六富士、百鬼夜行、琉球八景、瀟灑し）肉筆彩色は他に勝れて見事なり、別に爲一翁が畫傳を誌す委しくは其書を見るべし

○辰齋 俗稱

摺物中本の讀本等を畫きたり、北齋辰政と云し頃の門人なり、狂歌摺物并月並の詠艸差畫等多く此人の筆なり、錦畫讀本は畫かず

○戴斗（文化文政の人） 俗稱伴右衛門 遠藤氏（小笠原家浪人なり）

始は北泉、（居住廻町平川町天神前にありしが後は不知）

北齋の門人なり、名を譲受て二代目戴斗と云、畫風師の筆法を能く學ひ得たり、眞僞やゝもすれは不知、浪花の刻本を多く書けり（大坂北齋と云、かく所のもの、能似するを以てなり）

武者鏡（板元浪花） 繪本（同上） 二代目戴斗 畫譜 小紋雛形

其他讀本類七八種あり枚舉すへからず

○蹄齋北馬（文化文政頃の人） 俗稱□□（居始神田、後下谷三筋町）

江戸の産

北齋に畫法を受て狂歌摺物畫を多くかく、讀本の密畫に妙を得て數十部の板刻本世に行はるゝは人の知る處なり、左筆の曲畫をよくす、後落髪す、（川柳風の狂句もよくす） 繪本三國妖婦傳は、玉山が繪の大本よりも一二年先に賣出せり、平家物語鎌倉見聞志（星月夜顯晦錄）の類、軍書の畫入もの多し（高井

蘭山編）新著の讀本は、枚舉するにいとまあらず（門人逸齋遊齋等多くあり）
畫風に一派の筆意ありて、後は土佐繪を慕ひて多く其趣を畫き、師の畫風と
は大に異なり

○魚屋北溪（文化より天保の今に至る）俗稱初五郎（居始四ッ谷鰈
が橋、後赤坂永井町代地）號拱齋 葵岡（姓氏の如く用ゆ）江
戸の人なり

始めは狩野養川院門人にて畫を學ひ、後北齋の弟子となりて浮世繪師となる
四ッ谷の魚屋なり、仍て畫名の傍に魚屋と記したり、摺物畫は勝れて妙手な
り、北齋の高弟にて畫法能く師の傳を得たり、讀本張交の錦繪等あり、役者
美人畫はかゝる彩色の密畫も亦名手なり門人多し、（彫刻の畫なければ名
不レ知）

薔の花（鬼武者）三冊 美少年錄（二幕より馬琴作）
吉原十二時（六樹園作）江戸名所附（彩色摺）

○雷亭春信 俗稱斧吉（江戸青山の人、狂歌を善す、窓の村竹の門人なり、堀川太郎春信と云り）號を八島定岡と云

北溪の門人となり狂歌摺物草雙紙讀本等を畫けり

○柳川重信（文化より天保三年に没す年五十餘）俗稱□□ 鈴木氏の男 江戸の人なり 號は雷斗（居始本所柳川町、后根岸大塚村）

北齋の門に入て畫法を受けて北齋の郢となり其娘を妻にす、雷斗の名を續て（始め本所柳川町に居しゆへ、柳川を以て姓氏の如くす）板刻の密畫に妙手なり、師の畫法をよく傳へて一派の風趣を書き、彩色畫は其風大に異なり、浪花の玉山が筆法を慕ひ亦國貞の浮世繪を似せたり、草雙紙を多く畫り（柳亭種彦初ての作、重信始ての畫、京一番嫁羽子板、西村與八板、文化四五年の比なり）讀本も出せり（柳亭始ての作、奴の小まん^{中本}、文字手摺昔人形^{大本}、山崎平八と云書林板元）草雙紙讀本ともに大に世に行はれて數十部を發行す、一家をなして世に重信風と云ふ、浪花に至て頗る用られしが、僅にして歸郷す、常

に人形細工、土の製作に奇巧あり、また南嶺が草畫の筆法を畫く、天保三年十一月没す、門人重山續て其業をなせり

按に重山は師重信の諱なり、馬琴作の俠客傳二篇五の卷の末二丁重信病おもりし時、重山續て畫しものなり（初篇は英泉畫なり、八犬傳は重信英泉南畫なり）其他讀本あり、彩色摺にて藤ばかりと云畫本あり、（麴町聚星閣角丸屋甚助板、小枝繁翁作なり）

○菊川英山（文化文政の比）俗稱爲五郎 市谷の産（麴町に住）

號重九齋 名俊信

始め父英二に畫を學びたり、（英二は狩野流の東舎と云人の門人なり、板刻の畫はかゝず、菊川一家の浮世繪師なり、造り花を業とす、近江屋と云）北溪は幼年よりの友なりしかば、其畫法を慕ひ北齋の畫をかけり、古歌麿没して後、自立して歌麿の畫風に似せて一家をなし、板刻の美人畫を出して、大に世に行れたり、豊國春扇と並ひ行れて、浮世美人繪中興一家の祖なり、始めは役者

繪も書けり、(文化三四年の頃、堀江町の團扇問屋、故有て悉く豊國の新板繪を不出一年英山の役者畫の團扇ばかり出せし事あり、其翌年の頃より國貞も初めて歌右衛門が猿回し與次郎の畫の團扇をかきしなり、夫より英山は團扇畫に役者を止てかゝず、美人畫を多く出せり、國貞より二三年も早く世に行はれたり、錦壽は麴町三河屋清左衛門といふ繪變紙問屋板元にて、始て英山の畫を出し、大ひに賣れしと云、歌麿没して美人畫絶たるに、英山時に逢て役者畫は豊國、美人畫は英山と並行はれ(豊國の役者畫、上表紙に一陽齋の畫像を英山畫き、英山の畫に豊國寄合書き等あり、交深く互に懇意なりしかば、諸族方へも二人にて席畫に出、絹地彩色畫も兩人へ命せられしと云)、草雙紙四五種あり(竹塚東子作大鷄塚三馬作板元西村、是始めなり、橋本徳瓶作、二三年續て出せり)美人浮世風俗は狂言振と不似、やはらかに當時の風俗をかき、遠國迄も名高く一時の妙手なり、錦繪は夥敷開板せり、文政の末より故ありて、多く板下を不畫、門人多し菊川流と稱す

菊川英山門人

英章（淺野氏錦書團扇あり）

英泉（別に記す）

英里（錦書あり冬木

氏）

英信（摺物畫多し安五郎）

光一英章（春畫本あり狂言作者な

り名章三）

英蝶（摺物畫あり）

其外數十人あれども、板刻の畫をかくざるものは爰にのせず

因に云、英山は畫才あれども讀本艸雙紙を畫く事には甚疎なり、十返舎一九作の貧福論のさしゑは此人の畫なり、艸雙紙も徳瓶が作の姉川頭巾といふ雙紙の畫は豊國の人物の中に、己が女畫を書加へしゆへ、其頃評判もよかりしに、北嵩も是に倣て畫きし艸雙紙讀本多くありしなり

○溪齋英泉（文化より天保にいたる）

俗稱善治郎后里介（江戸の産、

數ヶ所に轉宅して住所不定始番町、后根岸新田村）

姓藤原 本

姓池田氏

名義信、一に茂義

號溪齋

一號一筆庵

別號無名翁

可候（戯作の名なり）戯作の平雙紙中本春畫本等あり

白桂成は白桂
に作る

始め幼年の頃、狩野白桂齋の門人となりて書を學ぶ、(白桂齋は赤松某と云り
狩野榮川法印の高弟なり)後獨立して浮世繪をかけり(國春樓又北亭と云り)
初め青雲の志ありて仕官せしが、壯年よして流浪す、從來宋明の唐畫を好み、
書を讀むとを好んで、通宵眠るとを怠る、戯作を樂みとして近世艸箋紙中本、
春畫好色本を多く出せり、(薄彩色摺の春畫を工風せり、畫作の枕文庫、勝れ
て行はれたり)當時流行の繪風に倣て、浮世美人繪を多く書き、一時大ひに
行はれたり、北齋翁の畫風を慕ひ、畫則骨法を受て後一家をなす、青樓(新吉
原を云)遊女の姿を寫すに、委く其家の風俗體姿を畫くに、役者の狂言振に
似せず、時世の形体を新たに畫くとは、此人に起れり、近頃國貞も傾城畫は英
泉の寫意に似せて畫きし者あり、役者畫をかゝず、浮世繪師の見識を立しと
見ゆ、草箋紙合卷中本繡像讀本數十部を書けり、此人僅に文化の末より文政
の間に行れたれども、筆する所の讀本錦畫影敷板刻せり、(團扇畫も多し近世
藍摺の錦畫は此人の工風より流行す)京大坂の書肆より讀本多く出版す、三

都の讀本を江戸に在住して書きしは、北齋と此人のみなり、門人も多くありし

浮世畫譜（畫手本自初篇至十篇、尾州名古屋永樂屋東四郎板）容艶畫

史（美人畫の畫則なり、江戸書肆合刻）錦袋畫叢（諸職人畫手本、大坂

河内屋茂兵衛板）繪本初心畫譜（馬喰町二丁目西村屋與八板）畫本

（芝神明前和泉屋市兵衛板）

此他數本あり、枚舉するに遑あらず別記に出す

溪齋英泉門人

英春 俗稱大本氏小石川
春畫錦畫多し

英笑 初春川五七門人
京の人なり江戸に住す
草雙鉏錦畫あり

英之米花齋 俗稱源二郎、麴町、中
本讀本多く出せり

泉壽英齋 俗稱伊三郎、草雙鉏錦畫多く
あり、浪花に住して名を改む

泉晁貞齋 俗稱吉藏、靈巖島、草
雙鉏錦畫多くあり

泉橘紫鎖齋 俗稱仙吉、向島、中本多く
畫作を出す筆耕を尊とす

泉隣 俗稱口井村氏、櫻田、
中本さし繪あり

泉里嶺齋 俗稱彌吉、麴町、中
本さし畫あり

墨傳はもと漢
交なるを寫
めしもの、よ
しなり

星岡は何の地
名なるを知ら
ず或は府下永
田馬場などに
や

板刻の畫を見ざるは爰にのせず、英の字を畫名とする浮世繪師夥數あり、英
山門人と混同す、一時の人なればなり

墨傳に云、一筆庵英泉は星岡の産なり、父母存在の中は遠く出ず、（父は池
田茂晴、援田不言齋の門人にて書を能す、讀書を好み俳諧を嗜み、千家の
茶の湯を樂しむ、不白杯と友たり）母は泉六歳の時没す、父及び繼母に仕へ
て至孝なり、尤家貧しかりけるに、文化の始め、父は夏に没し母は冬没す、
幼き妹三人を養育せしに、譏者の爲めに誣られて流浪の人となる、水野家
に血脈多くして撫育せられしが、世のなりゆきを歎し、志を決して浮世繪
師となり、又劇場狂言作者初代篠田金治（后並木五瓶）の門に入、千代田十
市の名を續て、作者となりしが、再び畫工菊川英二が家に寓居す、（英二は
英山の實父なり其比行れて諸侯の召に應し彩色畫多くあり、肥州侯命せら
れて門人殘らすの畫を集玉ふ、其列に入て英泉と畫名を書出せしより、是
を名とす、英山門人と云ふ始めなり）泉若きより名を好まず、巖々として住

蝶は魚の腮際
に寄生する毒
虫なり

所を定ず風を書き羽子板職繪を彩り需に従て辭する事なし、(此頃風を畫くものは、一日二百文なりしが、英泉七匁五分つゝ取しなり、是より以後、他人も今に至て三匁と定りしと云、達者の人は二人分を受く)或は板刻の畫を半かきて行所を知らず、板元迷惑して行所を尋れば、娼門酒樓に酔て死せるが如し、漸に其後を寫して是を與ふ、芝金杉の濱に碗屋六兵衛と云る魚問屋あり(後に巴屋仁兵衛と云る板元なり)此人傍はら錦繪其外の板元を業としたる故、泉を携て家に養ふ、泉衣類を借着して出て歸らず、主人漸に行所を知て尋れば、うの衣類を酒食に換て酔て本性なし、或は時に虎齧を生ながら蝶と共に煎て是を喰ひ、羽織を着し下駄を穿き近邊に出るかと思へは忽ち夜船に乗して上總木更津に至る(木更津より五里程入周滙郡に池田氏の舊家めればなるべし)かゝる放縱無頼の人といへども、更に是を惡むものなし、板元のすゝめにより居を新橋宗十郎町に定めたれど、食客を集て晝夜門を鎖すとなし、家主後難を恐れて大に迷惑すといふ、如此

の行狀なれども、親族他人に金銀を借りず、只己が職業により其價を取て捨るが如くに遣ふのみ、其後妻を迎へたれど子無きゆへに一女子を養ふ、是より後、漸く板刻の繪に精を拙て夜も寝ず、門外に出ず、十有餘年の間、彫刻の繪本錦繪、他人に勝れて筆する所夥く、世に發行すと云々

彫物大工

○後藤茂右衛門（文化より天保の今に至る）雪旦の子 聖旦（神

田）俳名 五樂 江戸の人なり

始め狩野家の門人となり、雪舟の畫風を學ひて一家をなす、浮世繪にあらずと云へども、一蝶の畫風をかき、或は唐畫の筆意も能す、按に長谷川等伯（始久六、法眼に叙し、雪舟五代と書す、）の畫裔を續しものなるべし、畫法一家をなして板刻の繪本多し殊に江戸名所圖會勝れてよし、摺物繪に艸筆のもの多く書けり、一派の名手なり

雪旦

男
雪堤

按るに、東都に雪舟の畫裔と稱するもの多し、川島雪亭（田安侯の畫師なり、

雪舟の畫孫なり、雪舟と少し異なれども名手なり寛政頃より天保の今に至
て存す、）又櫻川秋山と云人あり（天明寛政の頃の人なり、雪舟の畫孫と稱す）
本郷に住す（畫則も冊を板刻して畫論を出せり）長州侯の藩中に雲谷の畫齋
有り、當代は不學畫といへり、町繪師に堤等琳と云ものあり、雪舟十三世の畫
齋と稱す、畫法大ひに異なり別に記す、各混同して誤傳ふ、其外諸國に雪舟流
の畫を慕ふもの有り、自立して其畫齋と稱す、元祖雪舟（雲谷軒等揚）稀代
の名畫なれば、其英名を慕ふが故に、類族多きなるべし（佛家にやゝもすれ
ば、空海の作佛惠心の作佛と云あるが如し、）此雪且翁は一派の妙手なり、俵
屋宗達光琳の筆意に倣ふて畫きしものもあり、明畫体に寫せし山水なども見
ゆ、其善きを探て畫くは、名人の所爲なり、浮世畫に列するものにあらすとい
へども、板刻の畫多くあれば姑く爰に載す、法橋玉山杯の類なり

○泉守一（寛政より文化中没す五十餘歳）俗稱吉兵衛 泉氏（居本
郷一町目）號壽香亭（江戸産なり）目吉と稱す（俗中の渾名なり）

古等琳といふ
は深川齋のこ
と也

始めは古等琳の門人なり、后狩野探信門人となり、守の字をゆるさる、町書に
は可惜名筆なり、武者畫を善かけり、父は泉義信と云る狩野流の門人にて畫
工なり、守一は俗稱の目吉を以て畫名とす、本郷の一俠客たり、能狩野流の畫
法を學ひ、墨畫の雲龍鍾馗の繪に妙を得たり、戯れに摺物畫、花鳥の團扇畫等
を出せり、泉吉兵衛は諸社御普請の修復彩色御用を勤む、(日光久能山、江戸
兩山の類)町繪職人の頭なり(齋藤源左衛門請負なり)親吉兵衛より續て二
代勤む(三代目吉兵衛は門人林之助と云し者なり、實子女婢にて相續す)生
涯名を不好うの畫きしは王子權現に爲朝の額あり、本郷弓町天神に五郎時
宗の額あり、湯島天神には童子遊びの圖あり、是も額なり、其他尙多し、門弟
に泉鐵あり、壽川齋と號す能師の畫風を學ひたり

○堤等琳 號深川齋雪山 江戸の産なり 叙法橋

二代目等琳の門人なり、雪舟十三世の畫裔と稱す、一家の畫風骨法を立て、雪
舟流の町書を興せしは、元祖等琳を以て始祖とす、安永天明の比より此畫風、

市中に行はれて、幘書祭禮の繪燈籠にはこれをよしとす、當時の等琳は畫風の筆力勝れて妙手なり、摺物團扇交張の板刻あり、仍て此に列す、淺草寺に韓信の額あり、秋月と云しを、三代目等琳と改名せし時の筆なり、今猶存す、雪舟の畫法には似ずといへども彩色骨法、一派の筆力を以て名高し、畫く所の筆意、墨色の濃淡、絶妙比類なし、未だ京大坂に此畫風を學ぶものなし、門人あまたあり繪馬や職人、幘畫職人、提燈屋職人、總て畫を用る職分のものは、皆此門人となりて畫法を學ぶもの多し、門人深遠幽微の畫法を會得せず徒らに筆の達者を示さんとして、師の筆意を失ふもの多く、其流儀を世に亘繪と賤しめて、職畫と云ふに至りしは歎かしきとなり雪山は貝細工等種々の奇巧を造りて見世物としたる事あり（大坂下り中川五兵衛籠細工の作なり）諸堂社の彩色も、多く此人の請負にて出來し所あり、（堀の内妙法寺土富店祖師堂、玉姫稻荷、其他多く見ゆ）近世の一名工なり

堤等琳 元祖 谷稱係二 堤流の祖
源等琳ト云フ

堤等琳 二代目 俗稱吟二本姓月岡

門人堤 尊五合號雄子定 二代目 雪丘
孫二 居神田大工町 孫二 俗稱筆安

目吉

秋月

等琳 三代目 別記アリ
法橋雪山茶川齋

秋琳 春居ナリ

榮山 月岡
深川三谷

等明

等揚 鮑町

等舟 霞山日本橋中通リ萬丁
蕭風ヲ吹テ一派ヲ書ク妙手ナリ

等川

等

秋月 始筆船
今雪村

雪仙 本町一丁目

等榮 茅場町

泉山 松月

増補浮世繪類考 終

明治廿四年四月廿二日印刷
明治廿四年四月廿三日出版

定價

一冊	金廿五錢	郵稅一冊六錢
六冊	前金一圓卅五錢	御注文前金郵
十二冊	前金二圓五十錢	券代用一割増
		每月一回發兌



發行所

博文館

東京日本橋區本石町三丁目十六番地

編輯者 岸上操
印刷者 大橋新太郎

博文館每月定期刊行定價表

名目	發兌回数	一冊正價	六冊前金	十二冊前金	廿四冊前金	一冊郵稅
日本商業雜誌	每月二回 三日十八日	金八錢	金四拾五錢	八拾五錢	壹圓六拾錢	一錢
日本之少年	每月二回 一日十五日	金八錢	金四拾五錢	八拾五錢	壹圓六拾錢	一錢
日本之法律	每月一回	金拾錢	金五拾七錢	壹圓〇八錢	貳圓	一錢
法學協會雜誌	每月一回	金拾錢	金五拾七錢	壹圓〇八錢	貳圓	一錢
日本大家論集	每月一回	金拾錢	金五拾七錢	壹圓〇八錢	貳圓	一錢五厘
少年學術共進會	每月一回	金拾錢	金五拾七錢	壹圓〇八錢	貳圓	一錢五厘

